
奏聖のストラディバリウス

ナマクラ三蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏聖のストラディバリウス

【Nコード】

N6798M

【作者名】

ナマクラ三蔵

【あらすじ】

聖暦1999年、世界は教会によって統一されていた。各国には教会が選定した王が国のトップとして置かれ、それぞれ統治の下で人々は奏術と呼ばれる万物に干渉する力を日常的に用いて平和に暮らす一方で謎の秘密結社『滅びの序章』テロに脅かされていた。時同じくしてアルカディア学園に一人の少年が入学してくる。少年と一振りの『語る剣』が出会った時、止まっていた運命の歯車が動き出す。

始動（前書き）

文章が分かりにくいとは思いますが、その所はどうかご了承ください。

序に誤字・脱字、感想などが有りましたら作者まで。

始動

1.

日も昇り切らぬ早朝。

太陽は地平線から丸い顔を半分ほど覗かせて、白く輝く。

低い仰角で射し込む光は眼下の地上へと。

朝の冷たく澄んだ靄の中、照らし出されるのは白亜の壁。

城壁の如く立塞がる。その高さは二階建てのビルに匹敵し、端から端までの距離は大よそ三キロを超え、厚みは一メートルを誇る頑丈なもの。

壁の中央には大型のトラックが二台並んで通つても余りあるアーチ状の石造りの正門が設けられ、鉄製の板には『独立機関アルカディア学園』の文字が刻み込まれている。

アーチを潜った先には校舎まで続いている石畳の道があり、左には芝生が敷かれたグラウンドが。

そのグラウンドに二つの影があった。

一つは短い赤髪をオールバックに纏めた二十代半ばの若い男で、すらり、とした長身に黒いスーツを着込み口には煙草を咥えていた。もう一つは十五、六歳ぐらいの少年。上に白のカッターシャツ、下には紺のズボンを履き、寝癖なのか黒い髪はボサボサで幼い顔付とは裏腹に、その目付きは鷹のように鋭い。

十メートルの距離を置いて対峙する二人、その間には緊張した空気が張り詰めていた。

闘争の空気だ。

ぴりぴり、と肌を刺す空気の中、男が口火を切る。

「準備はいいか？」

男の問いに少年は腰を落とし、不敵に笑って答える。

「ハッ、それはこっちの台詞だぜ。そういうテメエこそ今の内に土

下座して謝る準備をしとけよコラ！」

男が苦笑。では、と一呼吸を置いて

「始め！」

合図と同時に、少年は地面を蹴り、男に向かって一直線に駆け出す。様子見など論外だと少年は速攻に打って出たのだ。

少年の取った行動が予想外だったのか。男が明らかな動揺を見せ、口から煙草が零れかける。

微かに焦りの色を滲ませながらも落ち付いた動作で男が指を鳴らす。透き通るような音色が一つ。

その足下に浮かび上がったのは深緑の円陣型の紋章。真ん中に描かれているのは青々と枝を生い茂らせ伸ばした大樹だ。

続いて、男の周囲に独りでに浮遊する拳大サイズの玉が出現。

男が再び指を鳴らす。

呼応して光の玉が加速、前方へと飛んだ。

矢の如く飛んで来る光弾を恐れる様子も無く、少年は速度を緩めず肩で風を切って走り、光弾をギリギリまで引き付けたところで右へと急制動。

掠ることもなく、目標を見失った光弾がその背後へ飛んで消えていく。

男が先程と同じく光の玉を出現させようとするが。

させるか、と少年は一気に距離を詰め、男を間合いに捉える。

「貰いだぜ！」

握り締めた拳。それを解き放つ。

勝利を確信した少年に、男が残念そうに告げる。

「0点だ、カケラザカ神楽坂 サキ紗樹」

刹那

突き抜ける衝撃にその足が地を離れた。

爆発的な勢いで隆起した地面。それが握り固めた拳へと一瞬で形を変え、少年を打撃したのだ。

ぽーん、と。

車に撥ね飛ばされたかのように少年は飛び、空中で一回転、そのまま地面に落ちる。

それも仰向けでは無く、俯いた状態で。ぐえっ、とカエルを踏み潰した様な間抜けな声を残して沈黙、動かなくなった。

起き上がって来る気配はなく、手足だけがビクビクと痙攣していた。

その一週間後・・・

聳え立つ近代的なコの字型の六階建て校舎。

穏やかな昼下がりの午後、その屋上には静かな風が吹いていた。

優しく頬を撫で通り過ぎていく風。日差しも柔らかく空も綺麗なブルーで、日向ぼっこには最適の環境と言える。

そんな中、日向ぼっこを楽しむ影が一人。

着崩した白い半袖のカッターと紺のスボンに身を包んだ黒髪の少年だ。

心地良さに、鷹のような鋭い目付きを緩め、いい天気だ、と少年は目を細める。周囲に人の姿は無く、一人堂々と中心で仰向けになって屋上に寝っ転がっていた。

唐突に、少年から見て右の斜め上、鉄製のドアが小さな軋みを上げる。

屋上の入り口、顔を覗かせたのは二人の男女。

「あ、いた・・・」と少年を発見した茶髪の男が声を上げる。

男は片方の耳に銀のピアスをぶら提げた目鼻立ちの整った爽やかな優男で。

真っ直ぐにこちらへと歩み寄って来る男の背後には、付き添う様にオレンジ色の髪をショートカットに切った勝気そうな女が。

二人が羽織っている紺のブレザー。その右胸、白い羽を象った校章の下にはローマ字表記で、アルカディア、と刺繍が施されている。

少年は二人に一瞥をくれてやると、再び空を流れる雲を目で追う。

「また授業をサボって・・・、アルフレート先生がカンカンに怒ってたぞ」

「・・・」

心配するような男の口調に、少年は無言。めげずに男が言葉を重ねる。

「雲ばかり見てたって楽しくないし、何より時間が勿体無いと思うだろ？」

「・・・」

平然と沈黙を続ける少年。

「勉強しろとか、授業を真面目に受けろとか言わないから、取り敢えず俺と友達になろうぜ　サキちゃん」

微笑を浮かべて手を差し出した男が付け足して、そう言った。

男が付け足した最後の一言。

少年は勢いよく反応して跳び起き、怒鳴り散らす様に「俺をちゃん付けで呼ぶんじゃねエ
！！」と叫んだ。

「えー、駄目なのか？」

「当たり前だ！ちゃん付けとか男なら誰だって嫌に決まってるだろうが！つか、次言ったらブン殴るぞデメエ！！」

噛み付かんばかりに、サキちゃんこと、神楽坂　紗樹は男に向かって、一息で捲くし立て吠えた。

「いい渾名だと思っただけだな・・・」

「どこがだよ！？」

嫌だと吠える紗樹に、渋々といったようすで、紗樹のことをちゃん付けで呼ぶのを諦めた男。だが、気を取り直して再び手を差し出す。「俺の友達になってくれるよな」その手には悪意も打算もなく、ただ、純粹な好意があった。

が、

「友達も仲間もいらねエ、って何度も言っただろ^{ダチ}」

肌を打つ軽い音を鳴らし、無碍に男の手を払う。

場の空気に亀裂が走り、穏やかなものから険悪なものへと。

更に紗樹は唇の端を吊り上げて嘲笑を作り、仲良しゴッコなら余所でやってるよ、と男に言い捨てた。

直後、鈍い音と共に視界が大きく横にブレる。

殴られた。

そう認識した時には既に体が倒れ、頬に痺れたような痛みが広がっていた。

肘を着いて視界を起こした紗樹の視線がかち合ったのは腰に手を当てこちらを睨み付ける女の目。

さっきまで男の後ろにいた少女だ。

怒りの形相、少女が声を荒げて、言う。

「アンタ何様のつもりよ！常吉ツネヨシは何時も一人ぼっちなアンタのことを可哀想に思って言ってるのよ！」

女の言う通り紗樹はクラスで孤立している。

編入した当初から、その悪い目付きと凶暴な性格に、誰一人として寄り付かず、廊下を歩けば避けられ、ワザとらしく目線を逸らされる。

直接話しかけて来る者は皆無に等しく、遠巻きに紗樹を見てコソコソと話すだけだ。

「それなのに、アンタはそうやって人の好意を踏みにじって嘲笑って、恥ずかしいとか、申し訳ないとか思わないの！？」

言い切った少女。

聞き終えた紗樹の心の中、沸き出たのは反感。

口の端についた血を手で拭い、フツと笑って立ち上がる。

「ハッ、可哀想？人の好意？ふざけてんじゃねエぞ、俺は 今まで寂しいとか孤独だとか思ったことはねエんだよ！」

受けて立つ、と拳を構える紗樹。

その意図を感じ取った少女が呆れたような表情で

「私とやろうつての？無理ね、そんな素人丸出しの構えじゃ一発だつて当たらないわよ」と鼻で笑う。

当たらないと確信しているのか、その手は腰に添えられたまま。

「んなの、やってみなけりや分かんねエだろうが！」

怒鳴るように吠え、殴りかかるうとした瞬間。

「止めとけ、返り討ちになるぞ」

聞き覚えのある声。

伸びて来た手がカッターシャツの襟を掴んで、持ち上げる。

紗樹の足が宙を掻く。

「アルフレート先生！！」

振り向けば、そこには赤い髪を後ろへと撫で付けオールバックにした男、アルフレートが。

「全く、お前は問題ばかり起こすな・・・」

アルフレートと呼ばれた男が呆れたように吐息。

「離せて言っただろうが、この野郎！」

掴んでいる右の手を外そうと紗樹は躍起になって手足を振り回すが、緩む気配はない。

「あ、あの・・・」

恐る恐る、切り出そうとした少女をアルフレートが手で制して

「一部始終は聞いていた。お前等は授業に戻っていい」と優しく言った。

『は、はい！』

仲良く二人は声を揃えて答えると一目散に、開かれた屋上の扉へと姿を消す。

二人の姿を見送ったアルフレートが口を開く。

「どうしてお前はそうまでして他人を頑なに拒絶する？」

いきなりの単刀直入な言葉に、どう言ったものかと思考、出た結論は「俺は自分以外誰も信用できねェんだよ」という単純なもの。

「それは肉親でもか？」

「・・・」

答えず紗樹は押し黙り、静寂が訪れる。

数十分にも感じられたその重い静寂を破ったのはアルフレートの一

言だった。

「一つだけ言っておく」

「……?」

真剣そのものな表情と声に、紗樹は男の目を自然と注視。

アルフレートが諭すように言う。

「決して人は一人では生きられない、諦め、恐れて響き合うことを止めてしまえば人は墮落していくだけだ。それも無気力にな」

墮落……

妙に重く、恐ろしい響きを持った言葉だった。

「それだけはよく覚えて置け」

我知らず紗樹は首を縦に振る。

頷いた紗樹に、真剣な顔を打ち消したアルフレート。

「では、行こうか」

「行くつて、どこにだよ?」

「宝物庫の片付けにだが。まさか、何の御咎めも無しだと思ったのか?」

紗樹は細かいことが嫌いである。整理整頓というのはその最もな代表で、己の部屋でさえ酷い有様だったのだ。故に、倉庫の片付けなど持つての外。

「ンな面倒臭エことができるかよ、俺はやらないぜ」

腕を組み、断固拒否する態度を見せるが。

「お前に拒否権は無い。言っておくがサボろうとしても無駄だぞ、私が付いて見張るからな」

問答無用、と片腕だけで楽々と紗樹を引き摺っていくアルフレート。

「あ、オイ! 離せよ、この野郎!」

必死の抵抗も空しく。そのまま紗樹は屋上から強制退場させられることとなった。

く、クソっ垂れ・・・

校舎の一階、廊下の突き当たり。

そこに据わっているのは頑丈そうな鉛色の錠前で守られた宝物庫の扉。

扉が放つ圧迫感を無意識の内に避けているのか、周りには誰一人として近付かず、静けさに包まれている。

固く閉ざされた古めかしい鉄扉の前に、紗樹の体はどういう訳かボロボロで、全身埃塗れだった。それもその筈、屋上からここまで、ずっと床や階段を引き摺られて来たのだ。

未だ己の首根っこを掴んで離さぬ元凶を弱々しく紗樹は睨み付ける。睨み付けるこっちの視線に気付いたのか、その元凶、アルフレートが振り返った。

「どうかしたか？」

「どうかしたか？じゃねエ・・・背中が滅茶苦茶痛エんだよこの野郎」

痛みを訴えた紗樹に、アルフレートが普段の仏頂面で、

「安心しろ、私は生粋のドＳでな、責められて悶える人の顔を見ると凄く興奮を覚えるのだ。だから、そういう反応は大歓迎。因みに、教師になった理由は合法的に生徒を自分好みに調教できるからだ」

「さらっと自分の性癖カミングアウトしてるンじゃねエよこのド変態
！！」

予想外というか、その右斜めに行く発言に、紗樹は思わず叫んでいた。

「全然合法的じゃねエし！っーか、調教って何だよ！？」

「私に対して常にYESと答える従順な犬に仕上げることだが」

常識だろう、と言わんばかりのアルフレートの顔に、眩暈に似たものを覚える。

こんなのが担任かよ・・・

「あと私がドＳだということは衆知の事実だからな、言いふらして

くれても一向に構わん」

「……」

「何故、頭を抱える？」

この学園の異常さにだよ、と心の中で呟く紗樹。

頭を抱える紗樹を余所に、アルフレートは懷から取り出した鍵で錠前を解錠、両開きの扉を開く。

床に堆積していた埃が舞い上がり、紗樹は埃っぽい臭いに眉根を寄せる。

「さて、それでは始めようか」

アルフレートに片手で放り投げられ、宝物庫の床へ盛大な尻餅を着く。

「痛エ、投げることはねエだろ」

「文句を言う前に動け、時間は有限だ」

渋々、尻を摩りながら紗樹は立ち上がり薄暗い宝物庫の中、乱雑に積まれた箱を見渡す。所狭しと置かれた箱の数々、ふと、目に止まる物があつた。

あれは……？

宝物庫の奥、一際大きい輪郭を朧に浮き立たせた長方形の箱が。誘われるように近付いていく紗樹。

直立に安置された箱。手が届く辺りまで接近した所で、何が収められているか理解した。

それは一振りの剣、身の丈を裕に超える刃渡りの剣だ。

黒味のある鍛え抜かれた刀身は中華包丁にも似ていて一点の曇がなく、肉厚で重厚。余計な飾りや装飾もなく、唯一、鐔に掌大の白い宝珠が嵌め込まれ輝いている。

「でっけエ……」

圧倒的な大きさと重量感。息を呑み固まる紗樹に

「時間は有限だと言った筈だがな、私の話を聞いていたか？」とアルフレートが見兼ねてか、声を掛けた。

「コイツって名前あンのか？」

人指し指で眼前の剣を指し示す。

「ストラディバリウス。それがその音叉剣の名称だ」

「音叉剣？」

聞き覚えのある単語。だが、思い出せず。

「馬鹿なお前でも分かる様に私がマンツーマンで小一時間掛けて説明してやった筈だがな。それも、昨日」

「・・・」

「忘れた、か。いいだろう、もう一度説明してやるから、今度こそしっかりと覚えろ」

一息置いて、アルフレートが語り始める。

「予習を兼ねて音叉剣の前に、音素というものについて一通り説明しておこう。まず、音素というものは原子よりも小さい粒子だ。この世界で生まれた生物ならば保有量の違いはあれど必ず持っているもので、音素には微々たるものだが空間に干渉する力があり、呼出^{ロドエ}紋章^{シクレム}によって顕現させ、式という方向性を与えることによって明確な形で空間に干渉する。この技術を奏^{ソウ}でる術と書いて、奏術^{ソウギョウ}と呼ぶでは、とそこで一旦区切り

「音叉剣とは何の役割を果すものか、それは音素の増幅と補助管制を行うものだ。剣、と一口に言っても槍や銃など形態は様々だが共通しているのはコアクリスタルという人間でいえば脳の部分を持っていることだ。分かったな？」

紗樹は首肯して、透明感のある白い宝珠、コアクリスタルに触れた。ひんやりとした冷たい感触が指先から伝わってくる。

「話をその音叉剣に戻そう。作者は不明、故障しているのか一度も起動したことのない只のガラクタだ」

「故障って、傷一つねエけど？」

欠損している箇所はどこも見当たらず、コアにも罅一つ入っていない。

「確かに、表面上に損傷はない。だが、ウンともスンとも言わぬのだ。剣としては十分使用できるかもしれんが、音叉剣としては壊れ

ている」

「ふーん、そっか」

「それよりもさっさと片付けろ」

へいへい、とやる気の無い返事をして紗樹は宝物、もとい、ガタクタの山へと向かい合う。

窓の外、日が傾きつつあった。

3 .

冬の寒さが抜け切っていないのか、夜の空気は涼しく。

冷たくさえ感じる風を全身に浴びながら紗樹は再び屋上へと来ていた。

昼間と同じもので大量の汗を吸って上下共、未だに乾かず湿ってベタつき、ヨレヨレにくたびれている。

あんの野郎・・・

あれから紗樹は倉庫の片付けをやらされた。それも休み無しの五時間ぶつ通しで、気付けば時刻は夜の七時をとくに過ぎていた。

駄賃代わりのジューズを一本頂戴して、今こうして屋上に来ている訳だが。

疲労の滲む背を手摺に預け、紗樹は天を仰ぐ。

見下ろすように真丸な月がぽっかり、と頭上の空に浮かんでいた。

「どうすっかな・・・」

呟いて深い溜息を一つ。辺鄙な所へ来てしまった己の見通しの付かぬこれからを嘆いて出たもの。

独立機関アルカディア学園、それがこの学校の名称だ。

ここの学園の目的はただ一つ、戦闘に関わるありとあらゆる人間を育成することである。

雑用から軍師まで何でもござれ、を標語に年齢や国籍、人種もバラバラな六百人の在校生達が日夜、将来に向け勉強に励んでいる。

「人間じゃねエ奴等もいるし」

背から蝙蝠のものにも似た翼を生やした者、長く鋭い尖った耳を持つ者など、在校生の中には人ならざる者達もいる。

しかし、これはごくごく普通の日常風景であり当前のことであって、己がイレギュラーなのだ。

だが、それでいい。馴れ合うつもりはないのだから。

と

「こんばんわ」

降って来た声に、風が止まった。

円柱型の貯水槽。その貯水槽の上、黒のローブを着用した全身黒尽くめの妖しい影が見下ろしていた。

「何者だデメエ」

闇夜に溶け込んだ影。

姿形は人のそれだが、どこか人とは思えぬ異様なオーラが。

背筋を走った底知れぬ恐怖に、紗樹の本能が警鐘を鳴らし囁きかける。

逃げる、こいつにだけは関わるな、と。

「んー、そうだね。取り敢えず“カオナシ”とでも呼んでくれれば
いいよ 神楽坂君」

「ッ!？」

読み上げられた己の苗字。

名乗った覚えはなく、当然、知っている筈がない。

逃げなければという意思が結実。踵を返し、扉へと一気に駆け込み
ドアノブを掴み捻る。

が、

「開かねエ!？」

返って来たのは虚しい感触。

ドアノブを何度も捻るが、ガチャガチャと空回りするだけで、開く
手応えがない。

「それじゃあ、早速試してみようか 君の可能性をね!」

頭上、笛の音にも似た風を切る音。空から落下して来る気配に、危険を察知して反射的に右へ身を投げ出す。
衝撃。

コンクリの地面が砕け、粉塵が白い煙となって拡がり視界を覆う。砂煙が風に流される。晴れた視界、そこにいたのは熊のような不気味な巨軀。

むくむく、と筋肉で膨れ上がった両の腕。体に比べ、異様に肥大したようにも見えるそれは丸太の如く太く、赤黒く滑りを帯びて。

俯き加減の頭が持ち上がる。のっぺりとした醜惡な面が露に、闇の中、血に飢えた双眸が紗樹を捉えて光った。

胃が萎縮し、こめかみを嫌な冷汗が伝う。

「ブラッディオーガ、中級クラスの妖物だよ。ま、この程度くらいは倒せてくれなきゃ困るんだよね」

妖物が身を僅かに屈めたかと思うと、両腕を振り上げて跳躍。

「冗談じゃねエぞ！」

紗樹は惡態を吐いて走る。

着地と同時に、盛大に叩き付けられた剛腕がクレータを穿つ。砕け散った破片が打ち上げられ、背後で無数の砂粒が地を打つ。追いつてる様に、次々と屋上が砲弾の直撃を受けたように陥没していく。

「さあさあ、逃げてないで見せてくれよ可能性って奴をさ」

影が貯水槽に腰掛け、呑気に嗤う。

普段ならばブチキれる所だが、命の危機が絶賛好評中で後ろから迫っている現在、余裕は無く必死で走っていた。

「ほらほら、さっさと倒さないと死んじゃうよ。それともアレかな、迫真の演技って奴かな？」

怒りが募っていくがどうにもならず、逃げ回ることしかできない。妖物の腕に黒い紋章が浮かび上がり、歪に筋肉が一回り膨張。組み合わせられた二つの手が一つの拳となつて一気に打ち下される。

さっきまでとは比べ物にならない凄まじい衝撃に貫かれ紗樹は吹き飛ばされた。

あ、という間抜けな、悲鳴にも成らぬ声を漏らして、そのまま屋上から投げ出される。

一秒という時間が無限にも引き延ばされ、視界が反転、辛うじて見えた手摺を掴もうと手を伸ばしたが、掠りもせず、宙を掻く。

またかよ・・・

覚えのある景色だった。

以前は夜空ではなく、血に染まったような赤い空が広がっていた。

死ぬのか、俺

あの時は偶然にも助けられた。アクシデントともいえる出来事によって、だが、二度目は無いだろう。

痛いんだろぅな・・・

六階の高さから落ちた体が容赦なく地面に叩きつけられ、内臓と血をプチ撒ける凄惨で吐き気を催す恐ろしいイメージが脳裏に思い浮かぶ。

コマ送りで、しかし、確実に体が落下していく。

嫌だ・・・

心が抗い叫ぶ。

俺は、俺は、まだ死にたくねエ！

目頭がカツと熱くなり、何故だか視界がぼやけた。

次の瞬間

ドクン、と右手が疼くように脈動。

同時に、右方向から飛び出して来た人の影を見て

空気が、

時が、己自身の呼吸さえもが停止した。

其れほどまでに、その少女には浮世離れた、いや、人形じみた美しさがあった。

青白い月光の下、柔らかく紗樹を抱きとめたのは紫紺の長い髪の少女。その肌は雪の如く白く肌、鼻は高く鼻梁が通ってすっきりとしていた。

顔の輪郭は卵型の綺麗な曲線で、切れ長の目と眉毛が、そして、何より能面のような無表情が冷たい人形の印象を与えている。

見惚れ、茫然とする紗樹を置き去りにして少女が口を開く。

「心拍数の上昇を確認、生命の危機と判断したので急行しました」
イメージ通りといふべきか、淡々とした無感情な機械のような喋り方だった。

「デメエは？」

「私の名称はストラディバリウス。最強無敵の音叉剣です、マスター」

ストラディバリウス

宝物庫に保管されていたあの音叉剣と眼前の美しい少女とは似ても似つかず、ジト目で紗樹は睨む。

が、少女は真顔、無表情は変わらない。どうやら本気らしい。

「音叉剣？どう見たって人間にしか見えねエけど？」

「私は正真正銘の音叉剣です」

断固とした口調で答えた少女が切り返して。

「それでマスターはどうするつもりなのですか」

「どうするって？」

「このまま、やられっぱなしでいるつもりですか？」

不意に投げ掛けられたその台詞に、

「そりゃあ勿論、やられっぱなしでいるつもりはねエよ。でも、ブン殴って倒せるような奴じゃねエし」

そうしている内に地表へ、少女が足を揃え、静かに着地。グラウンドに紗樹を下ろす。

数秒遅れで、妖物も追い着く。

紗樹のことを逃がす気は毛頭無いようで爛々と輝く妖物の双眸は捕らえて離さない。

「で、アイツをブツ倒す方法があるんだろ。だったらさっさとやれよ」

「了解しました」

少女の呼気が頬に触れた瞬間。

「！？」

声は出なかった。

己の唇が血の通った柔らかいものによって塞がれていた。それは紛う事無き、少女の唇だ。

頬がカツと熱くなる。

「お、俺のファーストキスが・・・」

喪失感を得たのも一瞬、右手に焼けるような痛みが走る。

異変は痛みだけに留まらず、右手の甲に光の線が生まれる。その線は生き物のように腕へと絡み付き模様を刻む。

線は手の甲から肘までに複雑な模様を書き残して止まった。

「同調紋様の書き込みに成功」

呟いた少女の足下、円陣型の紋章が展開される。鈴の音と共に現れた白く輝く紋章の中央には、白い羽の飾りが付いた兜を被った戦乙女が描写されている。

ふわり、と少女の足が独りで地に地を離れた。

「システム、戦闘形態に移行します」

閃光

少女の体から放たれたのは白い光。

視界を焼き尽くさんばかりの眩く凶暴な光に、紗樹は目を閉じた。固く閉じた瞼の裏までもを突き通す強烈な光は数秒間に渡って続き、引くように消えていった。紗樹が恐る恐る瞼を開くと、少女の姿は無かった。

「お、オイ、一体どこに行っただよ!？」

少女を探して首を右往左往させる。

まさか、死んでしまったのか、と紗樹が慌てたのも束の間。

「ここにいます」

頬を突かれ、驚いて飛び上がりそうになった。

首を捻ると、そこには三頭身にデフォルメされた少女、ストラディバリウスが。

「デメエ、随分と可愛くなったな」

「その代わり、マスターは力を増しましたが」

手元の重みに紗樹は視線を落とす。先ず、目に入って来たのは柄と白い宝珠。

次に、黒味がかった剣身の淵に視線を滑らせ、長方形の板にも見える独特の形を把握して、思い当たる物があつた。

それは間違いなく宝物庫にあつた音叉剣ストラディバリウスだ。

「・・・マジだったんだな」

「当たり前です。私が嘘を吐くと思うのですか？」

「いや、お前と会ったの今日が初めてだし」

轟、と風が唸りを上げる。

会話に気をとられている隙に接近した妖物が拳を放つたのだ。

視界一杯に広がった巨大な拳。紗樹はとっさに足で踏ん張り剣で受け止める。

骨身を震わす鈍重な一撃に膝が折れ、潰されそうになるが。

「舐めてんじゃ　ねエ！！」

体の奥底、不思議と沸き上がる力。突き動かされるようにして、紗樹は足と腕へ更なる力を追加、力任せに身体全体で押し返す。

妖物が大きくよろめき、隙が生じた。

空かさず踏み込み剣を繰り出す。

鉄塊の如き剣に振り回されながらも、鋭く鍛え抜かれた刃がその技量不足を補って、右の拳を切り飛ばした。

響く妖物の悲鳴を余所に、己の所業に驚愕する紗樹。

重く、大きな剣。それを現実振るっている自分自身の腕力が信じられないという具合に。

「すげエ！」

「自動的に肉体強化術式が掛かる仕様です」

紗樹の驚きに少女がそう答えた。

「よく分かんねエけど。強くなったっていいんだろ」

笑みを浮かべたのも束の間、妖物の手首、その切られた断面が泡立ったかと思うと。

「再生した！？」

筋肉が歪に膨れ、拳の形へと収束した。

傷一つなく元の通り完全に再生した拳が再び打ち出され、紗樹は先程と同じように受け止める。

「クソ、これじゃあキリがねエ！」

愚痴りながらも一度押し返すと、後ろへ跳躍、大きく距離を開けた。

一息吐いて体を休める。

たった一度の攻防にも関わらず、疲労がどつと両の肩に押し掛かり肩で息を乱す。

脳を直接殴られているような激しい頭痛や吐き気もある。

その心境を読んだように、「音素に対する拒絶反応が原因です」とストラディバリウスが言った。

出てきた難しい単語に紗樹は理解を放棄。

奥歯を食い縛り、痛みを堪えることに集中する。

「動けて数分と言ったところでしょうが、心配は要りません、次の一撃で決めます」

鈴の音。

剣を囲うようにして現れたのは白い帯の輪。

そこに刻まれているのは見知らぬ異界の文字の連なりだ。

その輪が回転し、徐々に加速、比例して剣身に灯った淡い光が輝きを増す。

「これをぶつける、ってか？」

問いに、少女は無言。肯定の返事と受け取った紗樹は見よう見まねで剣を構える。

剣の切っ先を下に垂らし、体を斜にした構えだ。

「行くぜ！」

勢いよく地を蹴り飛ばして、跳ぶ様に前へと。

脚力も強化されているのか、一步一步の間隔が大きく。十数メートルの距離が数歩で埋まった。

迎え撃つように飛来した拳を、身を捻って回避。殺人的な拳圧が、

頬に傷を刻み、肩を大きく裂いて鮮血を噴出させるが、恐れず懐へ飛び込み、紗樹は吠えた。

「くたばりやがれッ！！」

と腕に、有らん限りの力を込めて振るう。

疾駆の勢いを借りて繰り出されるのは横薙ぎの斬撃。悲鳴を上げる肩を無視し、光の剣と化した剣を叩きつける。

妖物の胴、一文字に走った光刃。

ワテンポ遅れて、走った線に青白く冷たい色の火が灯った。

その火は瞬く間に燃え広がって炎となる。

吠えるように断末魔を上げて妖物が仰向けに倒れていく。その過程で上半身と下半身が別たれ、立て続けに二つの地鳴りを響かせた。

骸となった妖物を業火が容赦なく喰らい尽くしていく。

燃え盛る炎を前に、安堵の溜息を吐く紗樹。張り詰めていた緊張の糸が途切れ、ふっ、と気が抜けた。

あ、ヤベ・・・

全身から力が抜け、前のめりに倒れていく。

地面が眼前に迫った時には既に、紗樹の意識は真っ暗な闇の中へと呑みこまれていった。

落とされて異世界

1 .

あ、と疑問符を含んだ間抜けな声。

突き飛ばされた

振り向き様、そう感じた時には既に体は六階建ての屋上から宙へと不思議なことに、落ちるという感覚はなく。スローモーションが掛ったように、ゆっくりと屋上が、赤く染まった夕暮れの空がコマ送りで遠ざかっていく。

ふと、屋上の淵、小さく見えた二つの顔に、雷に撃たれたような衝撃を覚えた。

二人とも見知った顔だ。

並んで見下ろす申し訳なさそうな、後ろめたいような顔と、いい様だ、と嘲笑う顔。

「何でデメエが　！？」

と口から届かぬ叫びが吐いて出て　スローモーションが解けた。五感が落ちる感覚を得た瞬間、体は急速に落下していた。

真っ逆さまに、瞬きする間もなく頭から、コンクリートへと

そこで、意識が覚醒、

ばつ、と少年は勢いよく布団を跳ね退けて飛び起きた。

激しい運動をした後のようにその呼吸は荒く、けたたましく心臓が早鐘を打ち鳴らす。

額に浮いた汗を拭う。

鼓動が少し落ち着いた所で辺りを見回す。

白を基調とした清潔感のある部屋だ。視線を落とせば汚れの無い白いシーツが敷かれた綺麗なベッドがあり、独特なアルコールの匂いがある。

窓から見えるのは憂鬱になりそうな灰色の曇り空。はっ、と頭へと手を伸ばす。

凹凸を確認するように手で触診。痛い所も欠けた所もないことに少年、神楽坂 紗樹は安堵の息と共に悪態を吐く。

「クソ…夢かよ」

わしゃわしゃと苛立たしげに頭髪を掻いた。

しかし、ここはどこだろう。雰囲気からして保健室のようだが、とそこまで推察して、

「っーか、どうしてここにいるんだ、俺？」

紗樹は記憶の底を攫うが、どうやっても抜け落ちている部分が思い出せずに腕を組み唸った。

「目が覚めたようですね」

声に反応して振り返ると、後ろの右斜め、少女が一人立っていた。

白いロングコートを纏った紫紺の長い髪の少女だ。

見覚えのある少女の人形じみた容貌。それを契機に、籠が外れたかのように一連の記憶が早送りで再生され、紗樹は全てを思い出すが。「えーっと、テメエは確か・・・」

眼前の少女の名前をド忘れして、紗樹は首を捻る。見兼ねてか少女が助け船を出す。

「ストラディバリウスです。マスター」

少女は特に怒った様子もなく、相変わらずの無表情で。余りの表情の無さに、こいつはロボットかサイボーグか、と思っ、そこで気付く。

そもそも、こいつは人間じゃねえんだよな

音叉剣ストラディバリウス

音叉剣とは音素の増幅、奏術の補助を行う武器で、剣と呼称されているが、槍や弓、いろいろな形体があり、共通しているのはコア

という人間で言えば脳に当たる役割を果たす宝珠を持つこと。

そして、

彼女は昨日、紗樹の目の前で変身して見せたのだ。

その音叉剣に。

「ッ！」

鈍い頭痛に顔を顰める。

「音素に対する拒絶反応がまだ残っているのでしょうか。ここまで酷いのを見るのは初めてですが」

「そんなに酷いのか、俺？」

「というか、音素を全く持っていないのですから、酷いのは当然です」

この世界に生を受けたものならば保有量の違いはあれど当たり前のように持っているもの。それが音素という力で、紗樹には音素が無い。

その保有量はゼロに等しく、否、存在してすらいらないのだ。

何故そうなのかは説明すると長くなってしまうので今回は割愛することにしておく。

「クソ、まだ痛みやがる・・・」

痛む頭を紗樹が抱えていると。

「大の男が頭痛ぐらいでピーピー喚くんじゃないよ」

気だるげな女の声。

紗樹から見て右、仕切りから姿を現したのは白衣の女。

黒のタイトスカートから伸びるストッキングに包まれた足は長く、スラリとしていて魅力的だった。

緩く波打ったセミロングの黒髪に垂れがちの黒い瞳、寝不足なのか眼の下には薄いクマが浮き出ており、疲れたような顔色をしている。病室だというのに、在ろう事かその女は口に加えた葉巻から紫煙をくねらせていた。

「オイ・・・、ここって保健室だよな？」

「病室では禁煙だとも言うのかい、残念だけどここは私の城でね。」

私がルールなんだよ、覚えておきな」

私の城、というからに女は保健の先生か何かだろう。

漂って来る煙を紗樹は片手で追い払い、うっとおしげに言った。

「違エよ、俺が嫌いなんだよ。臭エから」

「そうかい」と答えた女。だが、火を消す気配もなく、煙草を吹かす。そもそも、保健の先生が保健室で堂々と煙草なんか吸っていいのだろうか。

もし、生徒が煙草を吸っていたらどうするつもりなのだろうか。

「それにしても、あの一度も起動しなかった音叉剣を動かすなんてね。一体どういう手を使ったんだい？」

「コイツが何か勝手に出て来やがっただけで、俺は何もしてねエよ」隣に立つストラディバリウスを指差す。

指された少女は

「心拍数の急上昇を確認。緊急事態と判断、起動した次第です」と立て板に水を流すように述べた。

女が怪訝な顔で紗樹に向き直って言う。

「アンタ、本当に何にもやってないのかい？」

「だから・・・、さっきから俺は何もやってねエって言ってンだろ同じような問いに、逆切れ気味で紗樹は返すが。流石は大人といったところだろうか、逆に「短気は損をするんだよ、よく覚えておきな」と一言で窘められ、グウの音すらも出ない紗樹。

「あ、そうそう、名乗るのを忘れてたね」

女は紗樹へと向き直り、名乗った。

「アタシの名前は白崎シロザキ 亮子リョウコ、この学園の保健医さ。で、アンタは？」

「神楽坂 紗樹だ」

名乗られてしまった以上、返さないわけにはいかず。

渋々、紗樹は名乗った。

何時の間にか、亮子が紗樹の顔を覗き込んでいた。心の奥底まで見透かし、見定めるような鋭い視線に、紗樹は睨み返す。

「アルフレートが面白い奴を連れて来た、って聞いたけど・・・
馬鹿だってこと以外は分からないねえ」

「誰が馬鹿だ、誰が　　！！」

喚く紗樹に

「教官相手に策も無しに、真正面から突っ込むなんて馬鹿以外の何者でもないと思うけどねえ」

亮子が言っているのは、今から一週間前の戦闘能力評価試験のことだろう。戦闘能力評価試験とはアルカディア学園に入学する上で避けては通れぬ儀式である。

内容は単純な教官相手の模擬戦。

逃げ回るもよし、反撃するのもよし、出来るものならば教官を半殺しにしてもいいが、大抵の人間は返り討ちにされるのがオチだ。

兎に角、殺すのは御法度だが、持ち得る限りの全力を尽くすことが鉄側となっている。

そして、

紗樹は僅か一分という、アルカディア学園始まって以来の記録を更新したのだ。

それも、

己の惨敗という最悪な形で、因みに、その時の教官はアルフレートだった。

一分で負けた事実を改めて思い返してみても紗樹はガツクリと肩を落とし、暫く落ち込んでいたが、気を取り直しベッドから下りる。

立ち上がってみるが、幸いにも頭痛以外の異常は無い。

部屋を出ようとした紗樹に、「どこへ行く気だい」と女が背後から声を掛ける。

「どこへ行くこうと俺の勝手だろ」

そう吐き捨てて、紗樹は保健室の引戸をぴしゃり、と閉めた。

「　　なア？」

屋上へと続く階段の踊り場、紗樹は足を止めた。
二階の保健室を後にし、現在、屋上へと向かっているのだが。
三步後ろ、勝手に保健室から付いて来たストラディバリウスも釣られて立ち止まった。

「何でしょうか？」

睨み付け、険のある低い声を出す。

「何で付いて来てンだテメエ」

「緊急時の際、即座に対応する為にも私は常にマスターの傍で待機しておく必要があります」

「ハア？ンなもん必要ねエから帰ってろよ」

しっしっ、と手で追い払う仕草をするが、少女は静かに食い下がり
「ですが、私はどこでも召喚可能という訳ではないので、なるべく
傍に待機しておきたいのですが」

「必要ねエって言うてンだろ」

苛立たしげにそう言った紗樹は幾重にも張り巡らされた“KEEP
OUT”と書かれた黄色いビニールテープを乱暴に取り払いなが
ら階段を上って行き、鉄の扉を開けようとした。
が、

「あれ、開かねエ！？」

開かないというより、ドアノブ自体が微動だにしない。

負けじと力を込めるが、接着剤で固められたように全く動かず。

「クソ、どうなってンだよ・・・」

肩を落とした紗樹に、少女が

「その扉には奏術による封鎖が施されているので力付くで開けるこ
とは不可能です」と押し退けて扉に手を当てる。

小さな鈴の音が鳴り、掌大サイズの光り輝く円陣型の紋章が扉に刻
まれる。一瞬、別の紋章が浮き出たかと思うと、ガラスが割れる音
と共にそれが砕け散った。

ギイ・・・、と軋みを上げて重い鉄扉が外に向かって開く。

「これで良かったですか？」

勝ち誇った風もなく、少女は人形のようにどこまでも無表情だった。

「お、応・・・」

返答にもなっていない紗樹の言葉に少女は満足したのか、そのまま屋上へと。

バツの悪さを感じながら少女の後ろに付いていき、屋上に出る。曇りということもあってか、空気は生温く湿っぽく。

地面には未だ無数のクレータが穿たれたまま、手付かずの状態で放置されていた。

夢じゃねエんだよな・・・

こうやって改めて見れば、よく死なずに済んだものだと思い知る。増してや、あの妖物をたった一人で殲滅したことは己自身の所業とは言え俄かには信じ難かった。

いや、俺一人の力じゃねエか・・・

後ろを見れば、そのストラディバリウスが黙って虚空を見詰め、只突っ立っている。

人の力は借りないと決めて今まで生きていたのに、こっちに来てから、否、屋上から突き落とされたあの日から借りを作っただけだ。畜生、と無力な己を嘆く紗樹。

唐突に少女が問いを発す。

「ところで、どうして屋上に？」

封鎖を解呪して貰った手前、答えぬ訳にもいかず紗樹は

「昔っから俺は高い所が好きなんだよ」とぶっきらぼうに答える。

「理由はそれだけですか」

冷たい容姿に似つかわしくない愛嬌のある仕草で少女が小首を傾げた。

「それ以外に何があんだよ」

「そうですか」

関心を無くした様に再び虚空に目をやり黙った少女。それを余所に

紗樹は屋上から校庭を眺める。怪しい雲行きだというのに校庭では木製の剣や槍、薙刀などをぶつけ合う生徒達の姿が。

皆、必死に汗水を垂らしながらも、その顔には満ち足りた充実感があつた。

くだらねエ・・・

「マスターは参加しないのですか？」

不意に少女が声を掛けて来た。

「俺は不良だからな、真面目に授業を受けるとか無理なんだよ」

「不良とは・・・何ですか？」

返つて来た答えに、ガクツと肩を落す。この少女、どうやら本当に何も知らないらしい。

いいか、と紗樹は口を切つて説明しようとした。
が、

代わりに答える声があつた。

「不良っていうのは不真面目な生徒のことだ。例えば、お前のようにな」

低い声色、どう考えても怒っている口調だった。

振り向けばそこには“こめかみ”に青筋を浮き立て、扉の前で直立するアルフレートが。

「授業をサボった上に高みの見物とは、随分と偉くなったものだな」
表情と口調こそ落ち着いているアルフレートだが、その周りには十数発もの緑色の光る球が今にも解き放たれんと待機していた。

普段と変わらぬ仏頂面、しかし、浮いた青筋が怒りのボルテージを示して脈動。

かなり頭に来ているようだ。

「何度も何度も次は無いぞと注意したはずだがな、どうやら私自ら小一時間掛けて調教してやる必要がありそうだな・・・」

凄まじく不穏でヤバ気な台詞を漏らすアルフレート。

調教、という発言から喚起される禍々しいイメージに、紗樹は危機感を覚えて後ずさる。

捕まって調教されたら最後、間違いなく人格を変えられてしまうだろう。アルフレートが言う所の忠実な犬に。

（それだけは嫌だ

！！）

どうにかして逃げなければならぬ、己が己である為にも。

だが、

扉の前に立ち塞がっているアルフレートを突破することは不可能で、走って逃げた所で光球が飛んで来て御終いになるだけだ。

滅多に使わない脳をフル稼働させ、紗樹は考えるが、使わないだけあって直ぐに思考がフリーズしてしまった。

どう足掻いても絶対に捕まる絶望的な状況に思考を放棄、当たって砕けるの精神で突撃しようと駆け出した紗樹を、少女が無言でその襟首を掴み引き止める。

喉を圧迫される形になり、ぐえっ、と顔を歪めた。

「デメエ何しやがる　って、うわ！」

涙目で激しく咳き込みつつ文句の一つでも言ってやろうとして、己の体を軽々と持ち上げられる感覚に、紗樹は怒りを忘れ純粋に驚いた。

何時ぞやの時のように紗樹をお姫様だっこしたストラディバリウス、長すぎるのでストラと今後は略称する。そのストラが素早く反転、腰を低くした。

凄く悪い予感がした。

運命の神様に嫌われているのか、籤で当たったことは無いくせに、当たって欲しくない勘だけは外れたことがなかった。

それも百発百中の確率で。

やはり、と言うべきかそれを裏付けられるかの如くストラが弾かれたように走り出した。一直線に目指す先は屋上の柵、更にその先にある空中だ。

オイオイ、冗談だろ・・・

外れてくれと念じる紗樹の心情を知ってか知らずか、人一人を抱えているとは思えぬ速度で少女は駆ける。

「逃がすか！」

遅れて放たれた光球が少女を追尾。

僅かながら速度で勝る光球が徐々に迫っていき、喰い付こうとしたが。

しかし、

その時には既に、少女は屋上の柵を跳び越え宙へと踊り出し、急降下。追い付けなかった光球が明後日の方角へ消えていく。

「またかよ！こん畜生オ！」

少女に抱え込まれた紗樹は絶叫を上げながら真下の校庭に落下していく。

対照的にストラは冷静沈着そのもので、「心配は無用、私は音叉剣なのでこの程度の高さであれば怪我一つなく着地できます」

「分かつてても恐エものは恐エんだよ！」と言い返す。

高い所は好きだが、落ちるのは嫌なのだ。

そうやって叫んでいる間にも校庭へ着地、安堵の息を吐き、流石に諦めただろうと思つたのも束の間、頭上から光球が降り注ぐ。

ばら撒かれた十数発の光球を少女は避けて走る。

着弾した何十発もの光球が背後で蒼い芝生ごと土を盛大に連続して打ち上げた。

続いてアルフレートが屋上から飛び降りて追つて来る。

「まだ追つてくンのかよ！」

「当たり前だ！私は狙つた獲物は逃がさない主義だからな！」

突然始まつた逃走劇に、訓練に励んでいた生徒達が一人また一人と手を休めていく。それも当然、噂の編入生が見知らぬ美女にお姫様だっこされ、アルフレートに追いかけられているのだ。

面白い組み合わせであることには違いなく、口々に言葉を交わし合う。

「見て、あの人お姫様だっこされてる」

面白がるような声が耳に入ってきて、お姫様だっこされている己の現状を紗樹は再認識。

不良を名乗る、否、それ以前に、男である紗樹にとって女にお姫様抱っこされるといふのは非常にかっこ悪く、恥ずかしいことで顔に火が灯ったように赤面。

「下せ！今すぐ下せ！」

軽いパニック状態に陥った紗樹は慌てて大声で訴えるが。

「無理です」

無造作に却下された。

「下せて言っただろ

！」と叫びながら紗樹は

攫われるように校庭を去って行った。勿論、お姫様だっこされた状態で。

3.

二階の廊下の窓際、ふと、足を止めて男は呟いた。

「何やアレ？」

校庭で追掛けっこを繰り返しているのは見知らぬ少女と教官のアルフレート。

少女は白い長衣と艶やかな紫紺の長い髪を風に靡かせ、目付きの悪い男子生徒をお姫様だっこしながらも涼しい表情で走っていた。

白い肌、目鼻立ちのしつかりとした顔。

遠目から見ても分かる少女の美貌に、見ない顔だ、と男は独り言を心の中で漏らす。

新入生か編入生か？

自問して否定、首を振った。リストに記入漏れは無いし、チェックを忘れたという事も無い。

勿論、リストを作る前の段階で見逃したことも無い筈だ。

男にとって美しい女の子や可愛い女の子を把握することは癖であり、長年に渡って培われた習性であった。

後で調べよう、と男は視線をお姫様だっこされている男子生徒へ移

す。

手入れの施されていない黒髪はボサボサで、幼い顔付とは裏腹に、前述にあるように男子生徒の目付きは極悪そのもので、猛禽類の如く鋭く攻撃的だった。

どエライ柄の悪い奴やな・・・

「何を見てるんですか、生徒会長」

冷淡とさえ思える静かな口調。

横合いから話かけて来たのは眼鏡を掛けた如何にも堅そうな男。

歳は十六、七歳ぐらいで、その性格を体現したかのように、入念に撫で付けた髪は毛先できつちりと切り揃えられ、着ている紺のブレザーには埃どころかシワもなく。頭髪、服装ともに校則を厳しく守っていて、乱れがなく、まるで絵に描いたような優等生だった。

生徒会長、と呼ばれた男は呑気に、「おー、副会長か」と答えた。

「また会議を抜け出して、女の子の鑑賞ですか・・・で、眼鏡に適う可愛い子はいましたか？」

腰に手を当て溜息を吐いた副会長の声には半ば呆れた声色が。

「可愛い子やないけど美人ならおったで、それも聞いて驚くなよ、極上のベッピンさんやったで」

「極上、ですか。それは是非とも見てみたいですね」

興味が沸いた様子の副会長に、生徒会長は言葉を続け

「やる、いっぺん見てみたいやろ、せやから」

「ですが、今年の予算を決める方が私にとっても生徒会にとっても重要です」

二の句を継げさせず、副会長がきっぱりと告げる。

巻き込んでしまおうと画策して直ぐ様見破られた生徒会長は肩を落とし、「堪忍してや」と情けない声を出した。

「ははっ、振り切つてやつたぜ・・・」

日陰にも関わらず生い茂る雑草。

一面に生えたそれを、手当たり次第に薙り取っていく。

引き抜いた雑草を投げ捨てる紗樹の傍らではストラが体育館裏の陰から追手の影を確認していた。

「完全にまいたようです」

振り返つてそう言ったストラに、「ソリヤアヨカッタネ・・・」と紗樹は気の無い返事を返す。

「マスター、何故片言なのですか？」

「オンナニオヒメサマダツコサレナガラ、ニゲルナンテカツコワルスギルダロ・・・」

片言で喋りながら、ひたすら紗樹は機械的に雑草を抜き続ける。その思考は女にお姫様だっこされるといふ恥ずかしく情けない記憶に占領され、心配するストラの声は一言たりとも耳に入っていないかった。

かなりの人数に見られた、それも誤魔化が効かぬほどで、明日には学園中の噂となつていいるだろう。

明日のことを思うと、落ち込んでいた気分が余計に沈み、俯き加減の首が下がる。

鬱だ・・・

「私にお姫様だっこされたのがそんなに嫌なのですか？」

不満も無く、確認するようにストラが問うた。

「デメエに、っか、女にお姫様だっこされたのがカツコ悪いんだよ・・・」

「落ち込むようなことですか？」

取るに足りぬという口調でストラが言った。

それが己を馬鹿にしているようにも聞こえ、癢に障った紗樹は、「つまらないことで落ち込んで悪かったなア！」と噛み付くように吠えるが。

「それは知りませんでした。すいません」

眉根一つ動かさず頭を下げたストラ。予想外の反応に、仄かな罪悪感が沸く。

やりづれエ・・・

「ところで前から気になっていたことがあったのですが」

「何だ。言ってみるよ」

真剣な瞳に若干たじろぎながらも紗樹は訊き返す。

「一体マスターはこの出身なのですか？」

その問い掛けは台詞のままの単純なものではなく、何かを見透かしたような質問で、不意を突かれた紗樹は言葉を失う。

口を開くが喉の奥、物を詰められたかのように上手く言葉が紡げず。

「・・・日本だよ、ココとは違うもう一つのな」

仰ぎ見た曇り空は元いた世界と何一つ変わらず、灰色がかって黒く見えた。

「つまり、並行世界の日本ということですか」

「分かってて言っただろテメエ」

半目で睨む。

そう、紗樹はこの世界で生まれた人間ではない。

並行世界と呼ばれる。あつたかもしれない、という可能性によって何百、何千にも枝分かれしたifの世界。

その世界の一つから紗樹は来た。正確には呼び出されて、だが。

経緯を話そうか話すまいか、一度、二度と躊躇って、紗樹は重い口を開き語り始めた。

「俺さ、元の世界で喧嘩ばっかしてたんだよ。くだらねエ、意味の無い喧嘩ばかりをよオ」

あの頃、来る日も来る日も、喧嘩に明け暮れ続いていた。

生傷も絶えず、休みの無い日々、時計の短針が時を刻むような緩慢な速度で、しかし、確実に心と体が摩耗し擦り切れて行った。

「そんな俺にもよ、友達^{ダチ}がいたんだよ」

たった一人だけだとな、と笑う。

カンザキ ヒロシ
神崎 博、それがたった一人の友達の名だ。

その付き合いは小学一年生の時、喧嘩の助太刀に入っただけが始まりだった。

上級生三人に囲まれているところを偶々通り掛かり、何を血迷ったか気まぐれに加勢してしまったのだ。何故か気に入られてしまったらしく、それからというもの絡んでくるようになった。

博は容姿から性格に至るまで、全てが完璧でクラスの人気者で、最初、紗樹はその存在を心底煩わしく感じていた。

何せ、紗樹は既に、悪い意味で有名となっていて、同年代の子供からは嫌われ、その保護者からは疎んじられていた。

優等生である博とは水と油、喧嘩はしても仲良くなれる筈がなかった。

だが、それも・・・

学年が一つ上がる頃には、背中を安心して預けられる唯一の友達となっていた。

「俺みたいな奴でもアイツは普通に接してくれた」

小中と九年間の月日を経て紗樹と博は高校一年生となった。

月日と比例するように喧嘩の回数も増え、恨みを買って襲われることが多くなっていく。その恨みを持つ者の中に、毒島ブスジマという男が一人。毒島は隣町の高校生で、ゴロツキ共を率いていた。

切っ掛けは因縁を付けて喧嘩を売ってきた毒島達を、返り討ちにしたことだった。

闘争本能の赴くまま紗樹は暴力を振るい、足や腕、鼻の骨を押し折り砕き、文字通り全員を半殺しにした。後々で分かったことだが、毒島は滅茶苦茶強い奴がいるという噂を聞き付け、やって来たらしい、只、実の所を言えば、その滅茶苦茶強い奴というのは紗樹のことではなかったのだ。

そういう訳で毒島は紗樹を執拗に付け狙われるようになった。

「アイツだけは絶対にどんなことがあっても俺を裏切らない、って信じてた。でも」

ある日、博と呼ばれ紗樹は屋上の縁、いつもの特等席で待っていた

が。何時まで経っても現れない博に苛立ちを感じ始め、帰ろうとした矢先。

よくもやってくれたな、と毒島の声がした。
思考が働くよりも先に、背を突き飛ばされ宙へと放り出される。

さっきまで己が立っていた屋上の縁、そこから見下ろす二つの影が視界の端に映り、紗樹は目を限界一杯まで見開いた。

そこにいたのは毒島と・・・信じ難いことに博がいた。

嘲笑を浮かべる毒島の横では、博が血の気を失ったような蒼白の顔を見せている。

落ちていく中、博と紗樹の視線が交錯。一秒にも満たぬ時間、見つめ合い、罪悪感に揺れる博の瞳が申し訳なさそうに堅く伏せられた瞬間、悟った。

己が嵌められ、裏切られたのだと。

しかし、

時既に遅く、夕暮れに染まった空が急速に、瞬く暇も無く遠のいていく。

反比例するように地表が近づいてくる。

ここまでかと、死を覚悟した。

その刹那、

・・・よ、我が呼び声に応え、ここに来たれ！！

脳裏で声が響いた。厳かで厳粛な見知らぬ老人の声が大きく木霊するように。

次の瞬間、

視界で閃光が弾け、紗樹は気を失った。

そして、

「気が付いたら知らねエ部屋にいて」

紗樹が目を覚ましたのは、狭い部屋だった。黒のカーテンで日の光を遮断された薄暗い部屋の中には怪しげな本や置物が散乱しており、体の真下には赤の蛍光塗料で描かれた巨大な紋章が。

何が起こったのかわからず呆然とする紗樹。

部屋の奥から進み出たのは薄汚れたローブを着た老人だった。老人が近くまで寄って来たかと思うと紗樹のおでこに皺だらけの手を当て、驚いた顔をして矢継ぎ早に質問をぶつけてきた。
が、

ドイツ語かイタリア語か、外国語だったので何を言っているのか分らず黙っていた。

ハッ、と何かに気づいた老人が再び紗樹のおでこに手を当てる。

すると、音と共にその手の甲に光が灯った。

手を離れた老人がもう一度話しかけて来た時には、老人の言葉が理解できるようになっていた。

それが紗樹の最初で初めての奏術であった。

「ここが平行世界だって言われた時は驚いたけどよ、でも、何となく分った。ここが、俺の居た世界とは違うんだってことが」

回想を終えた紗樹は一息吐いて身を起こし、振り返るようにして立ち上がり、ストラの顔を真正面から見据えて告げる。

「つー訳でな、もう裏切られるのは御免なんだよ。だから、俺は自分以外誰も信じねえと決めた」

勿論、テメエのことな、と拒絶の意を込めて睨み付けた。
静寂

頭上の遙か上空では雲が流れて行き、灰色の空に一筋の切れ目が生じて晴れ間を僅かに覗かせ始めていた。

重い静寂を破ってストラが静かに口火を切る。

「私は武器です」

淀みの無い真っ直ぐな金色の瞳。

舌打ちして、似てやがる、と紗樹は忌々しげに呟いた。

色が、ではない。淀みの無い、クソ真面目で真剣な所が似ていたのだよく知っている人間に。

「例え、マスターが私を信じなくても、私はマスターの剣として信じ、従います　世界を敵にしたとしても」

静かに、だが、力強い口調で少女はそう言った。

己を見詰めるその姿が自分を裏切った友と重なって見え、心の奥の傷口が小さく疼いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6798m/>

奏聖のストラディバリウス

2010年10月10日21時41分発行